

日本のオペラ2019

石田麻子

1. 日本のオペラ2019

2019年は、オペラの全幕・全曲上演回数が回復傾向を見せた。とはいえ、大規模会場での上演は2018年からさらに減少している。総合芸術としてのオペラを一つの会場で一度に多くの人びとが共有する行為を我々は当然のこととして受け入れてきた。ただここに来て、日本で徐々に規模の大きな公演が減っているということは、オペラの鑑賞のあり方が変わってきているということでもある。オペラ公演は、総合的な舞台芸術として、開催規模の大きさに華やかさも加わり、社会的な注目も獲得してきた。その形が変化して、オペラの目的や対象が「細分化」されている。人びとの興味と関心が多様になる一方の現代社会において、実演される会場の規模による鑑賞者の多寡が公演開催状況をはかる主な基準となる状況は変化していくのかもしれない。上演手法や鑑賞のあり方に関する大きな変革の過渡期にあって、上演回数など定量的な事項に加えて、開催形態などについても様々記録していく必要があるだろう。

オペラ上演を通じた社会への課題提起は、大規模な催事ではなくても可能になってきている。その一つの手法がオペラの映像上映や映像配信だとすると、表現手法としてのオペラ公演と、媒体としてのメディア、とりわけインターネットとは分かちがたく併存していくと考えるのが自然だ。結果として、大規模な公演での鑑賞者の共時体験を補完するどころか、パッケージとして一層広く拡散提供され、それをどのように受け止めたかという議論がインターネット上で展開される。そうした中での次の課題として、映像の洪水のなか

で、鑑賞者から選択される公演となる方途を探る必要性が見えてくる。選ばれるためのポイントは、上演される作品や新しい演出なのか、それともこれまでに各演出家や指揮者、出演する歌手達がどのような成果を出してきたのかという個人の魅力なのか、団体や劇場のブランド力、あるいは上映や配信のクオリティなのだろうか。

2020年には、配信による公演提供があつという間に世の中を席捲することになる。まだその前夜である2019年は、日本が劇場やホールという空間をつくり、その中でオペラを積極的に受容してきた舞台上演のあり様が展開する最後の年となるのだろうか。今の段階では不明である。オペラ公演が、社会をうつつし出す鏡であるということを引き続き念頭に置きながら、2019年の一年間のオペラ公演から何が見えるのかまとめてみよう。

2. オペラ団体の制作

2-1. 大規模なオペラ団体の活動

まず、大規模な会場で公演を継続しておこなっている2つのオペラ団体の公演について見てみよう。そのうちの1つ、2019年の東京二期会は《金閣寺》《サロメ》《蝶々夫人》《カルメン》《天国と地獄》を上演した。

《金閣寺》は、フランス国立ラン歌劇場との国際共同新制作。宮本亜門の演出、マキシム・パスカル指揮による東京交響楽団による上演だった。同演出での初演は、日本での上演に先駆けて2018年3月にラン歌劇場（2018年初演当時はエヴァ・クライニッツ総裁）「Festival Arsmondo Japon」でおこなわれた。フランスの観客たちが、三島文学、日

本文化などに強い興味と高い関心を示していて、かたずをのんで舞台を見守る様子は印象的だ。同地での上演には日本と同じ役柄で嘉目真木子と志村文彦が起用され、2019年2月がその舞台の日本初演となった。オペラという欧州由来の手法をつうじて日本文化を体験することを、フランスの観客たちが特別な感情で受け止めるのとは異なり、日本の観客は日本の物語がオペラの語法で表現されることに慣れている。フランス上演での緊迫した空気感と、日本の観客が鑑賞する様子とは明らかに異なっていて興味深い。

《サロメ》は、ハンブルク州立歌劇場との国際共同制作。ヴィリー・デッカー演出、セバスティアン・ヴァイグレの指揮、読売日本交響楽団による上演となった。舞台上の階段は、いびつにゆがんで舞台に屹立、サロメの倒錯した精神状況を表しているようだ。一方で、声のためには三方の壁と天井、そしてその階段が反響板の役割を効果的に果たし、斜めに組み合わせられた階段が生んだ隙間から歌手が舞台上に入ったり、地下から顔を出したりするという演出に活かされた。

《蝶々夫人》は、東京二期会では栗山昌良演出舞台を上演し続けてきたが、今回から、宮本亜門の新演出舞台となった。ザクセン州立歌劇場ゼンパーオーバー・ドレスデン、デンマーク王立歌劇場、サンフランシスコ歌劇場との国際共同制作で、日本で幕を開けてから世界の3つの歌劇場で上演される予定である。近年の東京二期会は、こうした大規模な国際共同制作の推進役となる事例が少なくない。

《カルメン》は、「グランドオペラ共同制作」と題した国内各組織による大型の協働となった。田尾下哲による演出は、ブロードウェイでの物語に読み替えられ、加藤のぞみの歌うカルメンがミュージカル・スターを演じるという読み替え演出をこなし。ジャン・レイ

サム＝ケーニックが4公演の指揮を務め、神奈川県民ホールでの公演では神奈川フィルハーモニー管弦楽団が、愛知県芸術劇場公演では名古屋フィルハーモニー交響楽団が、それぞれオーケストラ・ピットに入った。翌年1月には札幌でも同じ舞台が上演されていて、エリアス・グランディが指揮、札幌交響楽団がオーケストラ・ピットに入っている。

《天国と地獄》は、大植英次指揮、鶴山仁演出により上演された。毎年、日生劇場が実施している「NISSAY OPERA 2019」との提携公演として、日本語上演でおこなわれたものだ。

このほかにも、《エロディアード》をセミ・ステージ形式で、《清教徒》を演奏会形式として取り上げた。複合芸術であるオペラ作品を演出の力を使わずにみせる難しさと、とはいえやはり声と管弦楽の融合した芸術である音楽面を際立たせられる良さとの両面が浮き彫りになる結果だった。

次に、**日本オペラ振興会**の事業部の一つである藤原歌劇団による大規模会場での公演を取り上げよう。2019年は、《ラ・トラヴィアータ》《蝶々夫人》《愛の妙薬》《ランスへの旅》は全てのプロダクションを、日本人指揮者および日本人演出家で制作した。これらの上演体制とは対照的に、2018年度に開始した「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」では、イタリア人指揮者、イタリア人演出家により、3月にメルカダントの《フランチェスカ・ダ・リミニ》をセミ・ステージ形式で、さらに11月にはスカララッティの《貞節の勝利》を上演した。いずれも日本初演の作品である。

《ラ・トラヴィアータ》は佐藤正浩指揮、東京フィルハーモニー交響楽団、粟國淳演出による。《蝶々夫人》は、鈴木恵里奈指揮によりテアトロ・ジリオ・ショウワ・オーケストラの演奏、故粟國安彦による演出舞台をとり

あげた。《愛の妙薬》は日生劇場との共催公演「NISSAY OPERA 2019」としておこなわれた。山下一史指揮、栗國淳演出による。《ランスへの旅》は、園田隆一郎指揮、松本重孝演出で実施された。新国立劇場での上演は、藤原歌劇団合唱部に加えて、二期会合唱団および新国立劇場合唱団が参加しての共同開催となった。組織形態の異なる劇場と団体との表に出る形での協働は言うほど簡単なことではないだろう。回を重ねていくには関係者の発想と努力が不可欠だ。

イタリアのヴァッレ・デイトリア音楽祭との提携による「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」は2018年度に開始されたシリーズである。初回の2019年3月ではメルカダント作曲の《フランチェスカ・ダ・リミニ》が日本初演された。イタリア南部プーリア州のマルティーナ・フランカで毎夏開催される同音楽祭は、ベルカント作品を中心に据えた取り組みを続けている。今回は、音楽祭ですでに上演されたプロダクションを、日本公演のためにファビオ・チェレーザが演出、セスト・クワトリーニ指揮の東京フィルハーモニー交響楽団の演奏で上演した。セミ・ステージと謳い、簡易な舞台装置での上演となったものの、演出は隅々まで行き届いていて上質のオペラ空間が実現した。平日の午後という時間帯にもかかわらず熱心な観客で客席が埋まり、来場者の舞台に対する集中力とオペラへの理解の高さに、来日していた音楽祭関係者が心底驚いていたことが印象的であった。日本でのオペラ上演は観客に恵まれていることが改めて確認できた。年度が変わって11月には、同フェスティバルの第2回の企画として、スカララッチェの《貞節の勝利》が日本初演され、喜劇作品に取り組んだ歌手達の熱演が成果をあげていた。

日本オペラ協会は創立60周年記念公演で《静と義経》を上演した。なかにし礼の作・台

本、三木稔作曲によるこの作品は、鎌倉芸術館での初演以来、再演の機会がなかった。的確な広報の甲斐もあって満員の観客を迎え、熱気のある会場となった。東京フィルハーモニー交響楽団を田中祐子が指揮、馬場紀雄演出による上演だった。

2つのオペラ団体の上演活動は、それぞれ特徴的だ。東京二期会が、各国の歌劇場との国際共同制作を積極的に展開しながら、海外の指揮者や演出家などのスタッフを起用、東京二期会に所属する日本人歌手により上演している。藤原歌劇団は日本人指揮者や日本人演出家により、イタリア・オペラを中心に団所属の歌手で上演する傾向が強まっている。加えて、2019年3月からは、「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」を開催、ベルカント作品を現代に再興する活動をおこなうヴァッレ・デイトリア音楽祭との連携を開始、ベルカント復興の活動は世界的に見ても特筆すべきだと言えるだろう。日本オペラ協会も、日本語のオペラ作品を取り上げ続ける方針をはっきり打ち出し続けている。

2-2. 地域におけるオペラ団体の活動

関西二期会は、2018年6月の大阪府北部地震のために、メイ・シアター大ホールが使用不能となって直前に公演がキャンセルとなって以来、大規模会場での公演から遠ざかっていた。2019年に入り1月～3月には「兵庫プロデューサー・パートナーシップ関連事業」として《ヘンゼルとグレーテル》を兵庫県と大阪府の3会場で、さらに10月には《フィガロの結婚》を兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホールで上演した。この他にサロン・オペラとして《子どもと魔法》を神戸市立灘区民ホールとの共同で実施するなど、公演会場との連携に意欲的な団体である。

関西歌劇団も、関西二期会同様に2018年の大阪府北部地震のために予定していた公演

がキャンセルになって、それ以来の大規模公演が2019年9月の《オリンピーアデ》。これは創立70周年記念、および第100回定期公演として、尼崎市総合文化センターあましんアルカイックホール・オクトで上演された。

堺シティオペラは、《黒蜥蜴》を堺市教育文化センターで実施、その他にも小規模な会場での上演をおこなって、2020年のフェニーチェ堺での新劇場開場公演《アイダ》に向けた活動を継続した。北海道二期会は、札幌文化芸術劇場 hitaru で《椿姫》を上演した。新しく開場した大規模な会場での地域のオペラ団体による公演となった。加えて、札幌市教育文化会館大ホールでも、北海道二期会創立55周年記念公演としてオペラガラ・コンサート&《道化師》を上演している。堺シティオペラと北海道二期会は、それぞれ長年活動してきた地域で大規模な劇場が開場したという共通点を持つ。先行して長年活動してきた各地のオペラ団体が、新しく開いた大規模な劇場との距離をどのようにとるのかという課題に直面している。拠点となる劇場を持たないオペラ団体ならではの課題でもある。

東京オペラ・プロデュースは、グノーの《ロメオとジュリエット》をなかのZEROホールで、さらにシャブリエ作曲《エトワール（星占い）》を設立45周年記念公演として新国立劇場中劇場で実施した。日本初演作品や、上演機会に恵まれない作品を蘇演するなど、継続的に1年に2演目ずつ公演している団体である。

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVII が《カルメン》をロームシアター京都メインホール、よこすか芸術劇場、東京文化会館で上演した。

さらに、各地域で大規模な公演を継続的におこなっている団体活動のみをみよう。

仙台オペラ協会が《メリー・ウィドウ》を東京エレクトロンホール宮城大ホールで上演

し、オペラ彩は《ナブッコ》を指揮にヴィート・クレメンテを迎えて、和光市民文化センターで実施した。NPO法人江東オペラは《ドン・カルロ》をティアラこうとうで実施している。名古屋二期会が《ホフマン物語》を愛知県芸術劇場大ホールで上演、さらに《フィガロの結婚》を名古屋市芸術創造センターとの連携企画公演「芸創オペラ」として上演している。四国二期会は《椿姫》を香川県民ホール（レクザムホール）小ホールで上演した。

上記のような各地域での団体の継続的な活動は声楽家を中心とする実演家たちの熱意に支えられてのものである。各組織は、地域の劇場や音楽堂等、あるいはそれらを運営する財団法人などとの協働や距離をとりながら、自らの活動を継続している状況にある。劇場や音楽堂が新たに開場したり、改修工事などのために一定期間閉館したりする会場の環境変化などにも対応しながらのことで、オペラ団体の自助努力が続いている。

市民オペラの活動も各地で引き続きおこなわれている。リーダーたちの代替わりの時期を迎えて、活動を停止する団体が複数現れているものの、地域の会館を舞台に、その運営団体である財団法人などが主催する活動は毎年継続している。

帯広市民オペラは、《カルメン》を帯広市民オペラの会が帯広交響楽団や市民バレエ『ティアラの会』などと共に上演した。弘前オペラは第48回定期公演《ラ・ボエーム》を弘前市民会館ホールでおこなった。伊丹市民オペラは、伊丹市民オペラ公演実行委員会と（公財）いたみ文化・スポーツ財団が主催、伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団がオーケストラ・ピットに入る。第33回となった2019年の公演は《カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》を取り上げた。立川市民オペラが立川市民オペラの会と（公財）立川市

地域文化振興財団の主催で《こうもり》を、アマチュア・オーケストラ TAMA21 交響楽団との共演で上演した。藤沢市民オペラは、2018-2020 シーズンの2年目として、ロッシーニの《湖上の美人》を演奏会形式で全曲とりあげた。ロッシーニを得意とする園田芸術監督によるソリストのキャスティングに加えて、藤沢市民交響楽団や市内の市民合唱団が取り組む画期的な挑戦となった。同作品が大規模な会場で本格的に上演されるのは初めてで、日本初演とうたっている。

このほかにも、長い年月活動を重ねてきた団体が記念公演をおこなっている。新宿区民オペラは25周年記念公演で《トゥーランドット》を、杉並区民オペラは第15回公演で《こうもり》を、佐賀県民オペラ協会は45周年記念公演として《こうもり》を、山形オペラ協会と山形交響楽団は、天童市市民文化会館創立45周年記念事業として《カルメン》を、それぞれ上演、各組織の周年記念事業とした。このほかにも、同様の市民活動としての公演が各地でおこなわれ、地域で活動する複数の団体による協働がみられた。市民オペラが民間の芸術文化活動のプラットフォームとして機能していることがわかる。

3. 劇場・音楽堂のオペラ制作

3-1. 劇場・音楽堂のオペラ制作

新国立劇場は、大野和士がオペラ芸術監督に就任して2年目となった年で、大野が指揮した2つの上演作品は、大がかりな舞台と制作体制で2019年の日本での上演舞台のなかでも最も話題を集めた公演活動となった。

2019年に行われた新制作は5つのプロダクションと、新国立劇場のこれまでの新制作数に比べると多い。上演された順にあげてみよう。5つのうち、1つはダブル・ビルである。

西村朗作曲《紫苑物語》は、台本を佐々木幹郎が書いた日本語によるオペラの世界初演

作品である。笈田ヨシの演出、多くのキャストの歌唱や大野の指揮、そして東京都交響楽団など、大規模な舞台での日本語歌唱による演者の奮闘ぶりが目立つ舞台となった。

《フィレンツェの悲劇》《ジャンニ・スキッキ》と、いずれもイタリア・フィレンツェを舞台にした作品を栗國淳演出で新制作、沼尻竜典が指揮をした。

《トゥーランドット》は、「オペラ夏の祭典2019-20 Japan ↔ Tokyo ↔ World 札幌文化芸術劇場・東京文化会館・新国立劇場・びわ湖ホール提携オペラ公演」と題しておこなわれたもの。東京文化会館と新国立劇場が共同制作することが話題となり、札幌に開場したばかりの新劇場、さらにびわ湖ホールも加わっての大規模な全国公演となった。アレックス・オリエの演出、大野が指揮するバルセロナ交響楽団が全部の公演でオーケストラ・ピットに入ったことも特徴である。舞台上には巨大な装置がそびえ立ち、新国立劇場合唱団、藤原歌劇団合唱部、びわ湖ホール声楽アンサンブルによる大規模な編成の合唱が客席に襲い掛かるような圧倒的な迫力の音響空間を作りあげ、トゥーランドットが最後に自死する結末も話題となった。

2019/20 シーズンの幕開けは《エウゲニ・オネーギン》。同作品の上演は2000年の藤原歌劇団と新国立劇場の上演以来のことである。演出には、ロシアからドミトリー・ベルトマンを招き、タチヤーナやオネーギン、レンスキー、グレーミン公爵の主要なキャストはロシア語圏出身者を招聘して上演した。なお、台風19号の影響を受けて、予定されていた最終日の公演が中止されている。

イタリアものでは《ドン・パスクワレ》が新制作舞台となった。この舞台のために、ロベルト・スカンディウツィをドン・パスクワレ役に招き、他にも主要なキャストは海外から招聘して実施した。

新制作舞台が観客を惹きつけて話題となることで、劇場が活性化することは間違いない。とはいえ、これは制作や技術スタッフにとっては、もちろん相当な仕事となる。開場して20年以上を経た新国立劇場のスタッフをはじめとする関係者が、劇場のオペラ制作に知識と経験を積み重ねてきたことにより可能になったとも言えるだろう。

この他に、ハンス＝ベーター・レーマン演出《タンホイザー》、ニコラ・ジョエル演出《ウェルテル》、グリシャ・アサガロフ演出《ドン・ジョヴァンニ》、栗山民也演出《蝶々夫人》、ヴァンサン・ブサール演出《椿姫》を上演、劇場のレパートリーとして定着している演出作品が並んだ。

日生劇場は、若手歌手を中心にしながらオーディションで毎回キャストを組んでいることが特徴だ。1つのプロダクションの上演回数多さもあって、観客の鑑賞機会のみならず、上演に携わる人材の活動機会を確保している。2019年はまず、《ヘンゼルとグレーテル》を演出広崎うらん、角田鋼亮の指揮で取り上げた。適材適所のキャスティングにポップな色合いの舞台を活かした演出が作品の魅力を引き出した。本拠地である日生劇場に加えて、愛知と宮城での公演も実施、各地域に継続的に舞台を届けている。

《トスカ》は、同劇場内での公演で、粟國淳演出、園田隆一郎指揮。イタリア・オペラ作品に取り組み続けているコンビによる上演となった。いずれも「ニッセイ名作シリーズ2019・学校無料招待公演」として開催して児童・青少年の鑑賞機会を確保、さらに「NISSAY OPERA 2019」と題して一般公演がおこなわれた。

東京文化会館は、先述の新国立劇場との共同制作《トゥーランドット》の開幕公演を、東京オリンピック・パラリンピック2020開催機運の醸成に向けた祭典「Tokyo Tokyo

FESTIVAL」の一環で、東京都／（公財）東京都歴史文化財団東京文化会館の主催事業として実施した。この他にも《泣いた赤おに》などを制作上演している。

びわ湖ホールは、新制作「ニーベルングの指環」第2夜《ジークフリート》をミヒヤエル・ハンペの演出、芸術監督の沼尻竜典の指揮で実施。この公演のチケットも早い段階で売り切れとなった。地域の劇場による自主制作の「リング」上演プロジェクトの進行を多くの人が見守っている。

《森は生きている》は中村敬一演出作品で、寺嶋陸也が指揮とピアノを務めた。これは、びわ湖ホール声楽アンサンブル出演作品として定番とも言える舞台。同アンサンブル卒業生のびわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバーたちもキャスティングされ、アンサンブル修了後にも出演機会を得ている。この舞台は兵庫県立芸術文化センターでもびわ湖ホールとの提携公演として、同じ座組みと舞台上演された。

《声》は、ゴールデンウィーク中におこなわれる「近江の春びわ湖クラシック音楽祭2019 沼尻竜典オペラセレクション」で上演された。

《トゥーランドット》は新国立劇場と東京文化会館の共同制作公演を提携オペラ公演として実施したもの。2日間の公演に東京での公演と同じ2組のキャストが参加、合唱にはびわ湖ホール声楽アンサンブルが全国の公演に参加していて、地元の児童合唱団以外は、他会場と同じキャスティングとなった。

兵庫県立芸術文化センターは、びわ湖ホールとの提携公演として《森は生きている》を上演した。毎夏おこなわれている佐渡裕芸術監督プロデュースオペラは、バーンスタイン作曲のミュージカル《オン・ザ・タウン》。ジャンル区分を理由に、本年鑑にはデータを掲載していないが、同劇場で8回公演、東京

で4回公演実施と、地域の劇場主催公演としては異例である。確実に公演制作拠点としての実績を積み重ね、地域の枠組みを超えた活動をみせている劇場である。

神奈川県民ホールは《ヘンゼルとグレーテル》短縮版で、県内巡回公演をおこなった。

3-2. 劇場・音楽堂等の共同制作

2019年は、劇場・音楽堂等が主催した共同制作の枠組みで、いくつかの大きな舞台制作がおこなわれている。《トゥーランドット》の共同制作は、新国立劇場と東京文化会館の項で、既にとりあげた。東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みとして、新国立劇場のオペラ部門芸術監督、東京都交響楽団の音楽監督、バルセロナ交響楽団音楽監督の大野和士を軸に進んだ巨大プロジェクトとなった。

(公財)愛知県文化振興事業団(愛知県芸術劇場)、(公財)神奈川芸術文化財団(神奈川県民ホール)、(公財)札幌市芸術文化財団(札幌文化芸術劇場 hitaru)、(公財)東京二期会、(公財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団、(公財)名古屋フィルハーモニー交響楽団、(公財)札幌交響楽団により、《カルメン》の共同制作が実施された。田尾下哲による読み替え演出は賛否が分かれたが、愛知公演は手直しを経て、整理された印象になっていた。なお、札幌文化芸術劇場 hitaruでの公演は、年がかわって2021年の公演で、団体別公演記録には記載しているが、巻末の公演表には掲載していない。

オーバードホール((公財)富山市民文化事業団)、東京芸術劇場((公財)東京都歴史文化財団)、(公財)熊本県立劇場、(公財)石川県音楽文化振興事業団(オーケストラ・アンサンブル金沢)(公財)読売日本交響楽団、(公財)九州交響楽団の共同制作となったのは、井上道義指揮の《ドン・ジョヴァンニ》。

このシリーズは、狂言、演劇、映画やダンスなど主にオペラ以外の分野での活動を基盤とする人材を演出に起用、日本全国の劇場で公演を展開してきた。今回はダンサーで振付師の森山開次を起用。会場となる劇場と、地域のオーケストラは、富山、熊本、東京ごとに組織をかえての巡演となっている。

3-3. 劇場・音楽堂等による周年事業

1980年代以降にとくに数多く建設された各地の公共ホールが、歴史を重ねて周年事業を展開、その機会にオペラが上演されることも多い。その際の上演団体は地域で活動するオペラ団体だったり、オーケストラだったりする。地域の文化機能としての会館、オーケストラ、オペラ団体の関係性、その結節点がオペラ公演であるということに改めて気づかされる。各組織が同じ方向を向いて公演制作をする瞬間的な事業だったり、継続的な関係性を構築しながらの事業だったりするのだが、そこには異なる組織の協業の形が実現、さらに当該地域の社会背景が重なる。

なら100年会館は、開館20周年を中村透、河合撰子作曲の《遣唐使 阿倍仲麻呂の夢》で祝った。北上市のさくらホールは、開館15周年記念で《蝶々夫人》を、兵庫県のたんば田園交響ホールは、開館30周年記念で《ヘンゼルとグレーテル》を上演。これは、単独事業ではなく、関西二期会、大阪交響楽団、およびその他複数のホールと連携しての事業となった。《泣いた赤おに》の原作者である浜田広介記念館の開館30周年を祝って、高島町文化ホール(まほらホール)で、山形オペラ協会が同作品を上演している。同じく山形では、天童市市民文化会館創立45周年記念事業として《カルメン》が同協会によって上演されている。山形市民会館開館45周年記念事業として知野礼美作曲《雪の女王2019》が初演された。

この他の地域においても、市制施行の周年行事、テレビ局の開局周年記念、ロータリークラブの周年事業などの機会を捉えて、オペラ上演がおこなわれている。

4. その他の動き

4-1. 招聘公演、オペラを中心とした音楽祭やオーケストラの活動等

(招聘公演)

英国ロイヤル・オペラの来日公演が、大規模にそして華やかにおこなわれた。デイヴィッド・マクヴィカー演出の《ファウスト》、キース・ウォーナー演出の《オテロ》の2演目をアントニオ・パッパーノが指揮した。招聘オペラ公演が国際文化交流としておこなわれてきた時代から現代まで続く、欧米の歌劇場による大規模な引越公演スタイルの事業である。わが国ではこうした招聘オペラ公演など大掛かりな公演事業の場合、テレビ局や新聞社が主催者に加わる形で公演規模が確保されることが多く、「メディア・イベント」として位置づけることが可能だ。英国ロイヤル・オペラ公演には主催者に日本経済新聞社が加わっている。日本でどれほどの人がこの形態によって、海外の歌劇場のつくるオペラに接してきたことか。海外招聘オペラ公演を通じて、わが国におけるオペラ観客がしっかりと根づいてきたと言えるだろう。

この他にも、マリンスキー劇場が来日して《スベードの女王》を上演、《マゼッパ》を演奏会形式でとりあげた。この来日公演も野村グループが特別協賛、主催に朝日新聞社が加わっての招聘事業となった。

ボローニャ歌劇場の《リゴレット》《セヴィリアの理髪師》は、前回までのフジテレビによる来日招聘公演のような「拠点型」公演ではなく、別のエージェントによる「巡回型」公演のスタイルとなり、地域の劇場を含む複数の都市での巡演がおこなわれた。同じ

くイタリアからの招聘となったトリエステ・ヴェルディ歌劇場も同様に、《椿姫》を各地の劇場で「巡回型」公演している。

ブラハ国立劇場は、《フィガロの結婚》を上演、ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場は、《魔笛》《フィガロの結婚》をとりあげた。これらの劇場は、例年通り典型的な「巡回型」公演の興行形態で複数の地域で巡演、各地の観客に鑑賞機会を確保した。

バーゼル歌劇場のベイビーオペラ《ムルメリ》は、0歳児から満2歳未満の乳幼児とその保護者のための演者との双方向性のあるイベントだった。赤ちゃんは保護者に見守られながら、15メートル四方程度のスペースを取り囲むように座っている。そこに、歌劇場所属の若手歌手たちが登場して動物をイメージした発声やムーブメントでパフォーマンスをおこなうのだが、実際にはそれに反応する赤ちゃんたちが主役となる。双方向性がある舞台だと言っても、赤ちゃんたちが、泣いたり叫んだり、歌手たちと一緒に身体を動かしたり、まったく関係のない方向性で活動を始めたりして、歌手たちとともに1つの世界をつくりあげていく30分ほどの作品だ。同歌劇場の教育プログラムが東京芸術劇場を舞台にした「サラダ音楽祭」でとりあげられた。シドニー・チェンバー・オペラによる《ハウリング・ガールズ》も、東京芸術祭ワールドコンペティション2019で上演された作品で、詞のない声だけの実験的な舞台となった。

(音楽祭)

東京・春・音楽祭は、ワーグナー作品上演に取り組んできたが、2019年は《さまよえるオランダ人》を演奏会形式で上演した。加えて「子どものためのワーグナー」と題して、同作品をカタリーナ・ワーグナーの演出により、1時間程度に短縮、オーケストラも小編

成にした版で、日本人歌手により原語上演、日本語ナレーション付きで上演した。三井住友銀行東館 ライジング・スクエア 1階 アースガーデンに、この上演専用のスペースを設置しておこなわれた。この「子どものためのワーグナー」は、バイロイト音楽祭と提携して、同地でおこなわれているものと同じスタイルでの公演となった。

《リゴレット》抜粋上演は、リッカルド・ムーティが指揮で登場。8日間にわたる自身のアカデミーでとりあげた作品で、演奏会形式により東京文化会館の大ホールで上演している。このほかにも数多くの演奏会を「上野の杜」でおこない、日本では稀なオペラを軸に据えた大規模なフェスティバル展開となった。

2019 セイジ・オザワ 松本フェスティバルでは、メトロポリタン歌劇場のプロダクションであるロバート・カーセン演出の《エフゲニー・オネーギン》がファビオ・ルイーゼの指揮で上演された。タイトル・ロールに大西宇宙が代役で登場したことが話題になった。

(公財)びわ湖芸術文化財団が、「近江の春びわ湖クラシック音楽祭 2019 沼尻竜典オペラセレクション」で、《声》を上演している。

第 57 回大阪国際フェスティバル 2019 では、大阪フィルハーモニー交響楽団が、シャルル・デュトワとの《サロメ》を同じく演奏会形式でとりあげている。

行政による制度としてのフェスティバルも例年通りおこなわれている。文化庁芸術祭や都民芸術フェスティバルが代表例で、一定期間様々な分野の舞台上演などに対して、フェスティバルの名前を冠している。このほか各地の市民文化祭、県民文化祭などで、地域にかかわりのある組織により上演されるケースがみられる。

川崎・しんゆり芸術祭アルテリッカしんゆりでは先述した藤原歌劇団が《蝶々夫人》を

上演、ダ・ヴィンチ音楽祭 in 川口と題して、アントネッロが《オルフェオ物語》を上演している。宇都宮市民芸術祭 40 周年記念事業では、山田栄二作曲の《歌法師 蓮生》が制作委員会により上演された。九州では、ふくおか県民文化祭で《メリー・ウィドウ》が実行委員会により、宮崎県の 2019 年度県民芸術祭で、ひむかオペラにより《ラ・ボエーム》が、南日本音楽祭・鹿児島オペラ協会の《カルメン》がそれぞれ上演されるなど、書ききれないほどだ。

(オーケストラの取組み)

日本各地のオーケストラによるオペラへの取組みは、演奏会形式が主体となる。2019 年はまず、アマチュア団体による上演をとりあげよう。

芥川也寸志メモリアル オーケストラ・ニッポニカは、《ニホンザル・スキトオリメ》を作曲の間宮芳生 90 歳記念として、野平一郎の指揮により、セミ・ステージ形式でとりあげた。当日は作曲者も来場して再演に立ち会い、会場の皆で祝った。もう一つの長い活動の歴史を持つアマチュア団体である新交響楽団は、飯守泰次郎の指揮により、《トリストランとイゾルデ》を抜粋演奏している。愛知祝祭管弦楽団は、「ニーベルングの指環」《神々の黄昏》で 4 年間にわたるプロジェクトを完成させた。こうしたアマチュア団体の活動が、オペラのみならず日本の上演史を着実に紡いできた。

日本フィルハーモニー交響楽団が、アレクサンドル・ラザレフ指揮で《カヴァレリア・ルスティカーナ》を定期公演において演奏会形式で上演した。ロシアの香りが漂う管弦楽の響きが興味深い。このほか、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団が、牧村邦彦の指揮、岩田達宗演出で《カブレーティとモンテッキ》を定期演奏会でとりあげ、舞台上演した。

4-2. 新たな創作の潮流

ここでは、大規模な会場での公演を中心にいくつかとりあげよう。**新国立劇場**の《紫苑物語》は先述したとおり。伊藤康英作曲の《ある水筒の物語》は静岡グランシップ中ホール・大地で、うきうきプロジェクトによる初演作品となった。川井郁子作曲の《氷山リリの大航海》は、**大阪芸術大学**第40回オペラ公演としておこなわれた。2018年に急逝した松下功作曲の《長安悲恋》は**東京藝術大学**が主催して、演奏会形式で初演された。

以下は、海外作品の日本初演作品である。**サントリーホール**主催のサントリーホールサマーフェスティバルでのジョージ・ベンジャミン作曲の《リトゥン・オン・スキン》は日本初演作品。大野和士指揮、舞台総合美術を針生康が担当した。歌手達や演奏家、指揮者の実演が素晴らしい音響空間を創り出していたが、映像の情報量が多く説明的とも言え、観客に何を伝えるのか整理する引き算が課題となった。

メルカダントの《フランチェスカ・ダ・リミニ》は藤原歌劇団の項で、《湖上の美人》は藤沢市民オペラの項で既述した。いずれも日本初演である。

中・小規模会場での上演にも創作初演作品がいくつかある。**オペラシアターこんやく座**は吉川和夫、萩京子、寺嶋陸也の共作による《遠野物語》を、**東京ミニオペラカンパニー**が鳥井俊之の《雪女の恋》を初演している。このほか**東京文化会館**がエトヴェシュの《くちづけ》、**Vivava Opera Company**がヘンデルの《エツィオ》を日本初演している。

4-3. 人材育成の機会

新国立劇場オペラ研修所の公演として、《ドン・ジョヴァンニ》が修了公演として中劇場で、《イオランタ》がオペラ試演会として小劇場で、それぞれ上演された。

びわ湖ホール声楽アンサンブルは、ホールが若手歌手たちと専属契約して、さまざまなホール内外の活動に起用している。大学や大学院などの教育機関を修了したのち、組織に所属しながら、研鑽を積む機会が提供されている。このほかの同ホールの育成事業には、芸術監督の「沼尻竜典オペラ指揮者セミナーV～『魔笛』指揮法～若手指揮者のワークショップ」がある。熊倉優、石坂幸治、石崎真弥奈、松川創、栗辻聡の5人の若手指揮者たちが参集、各場面をびわ湖ホール声楽アンサンブルなどの歌手たち、大阪交響楽団と共につくり学んでいく。そして、最終日には《魔笛》の演奏会形式上演（抜粋）がおこなわれた。

2019年の大学オペラ公演も各地の芸術系大学で開催されている。以下、大規模な会場で2回以上公演した大学をあげてみよう。**愛知県立芸術大学**は、知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）かきつばたホールと長久手市文化の家 森のホールで《いつわりの女庭師》を公演した。**大阪音楽大学**と**国立音楽大学**はそれぞれ《ドン・ジョヴァンニ》を、**東京藝術大学**は《魔笛》、**洗足学園音楽大学**は《ヘンゼルとグレーテル》を上演している。**昭和音楽大学**は「日中韓 新進歌手交流オペラ・プロジェクト」として、上海音楽学院および韓国芸術総合学校（K-ARTS）の学生たちも参加しての《フィガロの結婚》を上演した。各大学ともに、学部生や修士学生たちの教育の場としてとりあげるにふさわしいプログラムが並んでいる。

日生劇場が高校生を招待して鑑賞機会を設定する「ニッセイ名作シリーズ」、**新国立劇場**の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、東京と関西での公演が行われ、高校生達がオペラ公演に触れる場を提供しているのは例年どおりである。

若手の登竜門となるコンクールも各地で行

われた。民主音楽協会が主催する第18回東京国際音楽コンクール〈指揮〉は、第1位を沖澤のどかが獲得、第2位に横山奏、第3位に熊倉優が入賞した。東京文化会館など4者が主催する第17回東京音楽コンクールの声楽部門は1位なしの第2位に工藤和真、第3位に井出壮志朗が入賞している。

五島記念文化賞は、コンクールとは一線を画すものの、受賞者は海外研修の機会を得ることができる顕彰機会である。令和元年度オペラ部門新人賞はバリトンの大西宇宙とソプラノの森野美咲が選ばれた。大西は受賞後、セイジ・オザワ 松本フェスティバルでの《エフゲニー・オネーギン》のタイトル・ロールに急遽抜擢されて大役をやりとげた。同賞は日本のオペラ作品上演に対する助成もおこなわれている。2019年は、前2018年度の助成公演として芥川也寸志メモリアルオーケストラ・ニッポニカの《ニホンザル・スキトオリメ》、(公財)東京二期会の《金閣寺》、(公財)日本オペラ振興会の《静と義経》が上演されている。加えて、創作オペラ「雪おんな」実行委員会《雪おんな》、(公財)石川県音楽文化振興事業団《耳なし芳一》、(公財)びわ湖芸術文化財団《泣いた赤鬼》が新たに公演助成を受けて2019年に上演された。このほかの《紅天女》《月の影—源氏物語—》は同年に公演助成を受けて、2020年以降の上演となった。

文化庁の新進芸術家海外研修制度は、1年に歌手4名、2年に歌手1名がイタリア、ハンガリーに派遣された。

5. オペラ制作を取り巻く環境

5-1. 助成構造

(オペラ団体への助成)

文化庁・文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」は、日本芸術文化振興会を通じて助成がおこなわれている。オペラ

団体で「年間団体支援」を受けて本公演を実施したのは、東京二期会、日本オペラ振興会である。この枠組みでは、各団体に対して、基本的に採択後3年間は一定の助成がおこなわれる予定である。さらに同事業の単年度の「公演事業支援」枠では、オペラシアターこんにゃく座の《遠野物語》《ふしぎなたまご》《おじいちゃんのお笛》、関西二期会《フィガロの結婚》、関西歌劇団《オリンピアデ》堺シティオペラ《黒蜥蜴》、東京オペラ・プロデュース《ロメオとジュリエット》《エトワール(星占い)》、名古屋二期会《ホフマン物語》が対象となっている。さらに、びわ湖ホールは、声楽アンサンブルの公演を芸術団体の活動として、「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」から切り離して申請していて、《森は生きている》が対象となった。演奏会形式等の公演に対しても同助成事業が適用されており、日本フィルハーモニー交響楽団《カヴァレリア・ルスティカーナ》、大阪コレギウム・ムジクムによる西村朗作曲の室内オペラ《清姫—水の鱗》が対象となった。

同補助金は、公演前日までの準備経費を補助対象とし、公演当日の経費は対象外で、各団体に対しては、入場料収入の確保などの自助努力が求められるようになっている。これは公的助成が各団体の活動を援けていく考え方としての流れでもある。

(独)日本芸術文化振興会の**芸術文化振興基金助成事業**のうち現代舞台芸術を対象とした助成事業である「現代舞台芸術創造普及活動」でも、複数のオペラ公演が助成対象となった。音楽分野では、仙台オペラ協会《メリー・ウィドウ》、四国二期会《椿姫》など、地域のオペラ団体の活動に助成されている。このほか、ニッセイ文化振興財団《ヘンゼルとグレーテル》と《トスカ》、アントネッロの《オルフェオ物語》、藤沢市民オペラ《湖上の美人》、北海道二期会《道化師》が同助成を受

けた。

同助成の「多分野共同等芸術創造活動」は、複数の分野にまたがっているなどで特定ジャンルに分類しにくい活動に対する助成枠で、「鍵」プロジェクト実行委員会による《THE 鍵 KEY》が採択された。

「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けた団体公演も複数行われている。弘前オペラの《ラ・ボエーム》、能代オペラ音楽祭での《ラ・ボエーム》、ちちぶオペラ実行委員会の《メリー・ウィドウ》、愛知祝祭管弦楽団が「ニーベルングの指環」から《神々の黄昏》を完結した公演、紀州の民話をオペラに実行委員会《恋小袖の瀧》などが含まれる。アマチュア団体の活動が日本のオペラ上演の一端を担っていることがうかがえる。

上記は、日本芸術文化振興会から、各団体に配分されている助成金である。このほかに、文化庁の各事業から、オペラ公演に行われた助成をまとめてみよう。

「戦略的芸術文化創造推進事業」は、(i)「我が国の文化芸術による国家ブランドの構築と経済的価値等の創出や国際発信力を高めるための新たな展開に関する取組」および(ii)「地方や離島・へき地等において、優れた文化芸術活動を鑑賞・参画する機会と社会的価値等を創出する取組」に対する助成事業である。オペラは(i)の枠組みでの助成がおこなわれ、新国立劇場の《紫苑物語》、新国立劇場、東京文化会館ほかの《トゥーランドット》、東京二期会の《蝶々夫人》、日本オペラ振興会《貞節の勝利》およびセミ・ステージ形式での《フランチェスカ・ダ・リミニ》が採択されている。日本語字幕と、英語字幕の設定、プログラムへの英文表記などに加えて、わが国で制作されたオペラ公演が海外への発信力を備え、海外との連携構築を強める事業を支援する助成事業として活用されている。

このほかに、「文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—〈ミュージカル公演〉」では、オペラシアターこんにゃく座《タンゲーまほうをかけられた舌—》と《口はロボットの口》の巡回公演が対象となった。同事業〈音楽劇公演〉として、びわ湖ホール声楽アンサンブルの《泣いた赤鬼》、藤原歌劇団の《助けて、助けて、宇宙人がやって来た!》、東京オペレッタ劇場の《小鳥売り》、さらに同事業の〈児童劇公演〉でオペレッタ劇団ともしびの《トラの恩がえし》、同事業〈合唱公演〉で(公財)東京二期会が《カルメン》(ハイライト)《魔笛》(ハイライト)、ミラマーレ・オペラにより《てかがみ》(ハイライト)が各地で巡回公演された。こうした巡回公演は、各地域の子どもたちに対する鑑賞機会を着実に創出して、その積み重ねが観客やあるいは実際に創造活動になんらかの形でかわろうとする人材の育成につながっているものとする。

(劇場・音楽堂等への助成)

文化庁による「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」は、日本芸術文化振興会をつうじて補助がおこなわれていて、地域の中核となる各館の主催事業が助成されている。これには、[総合支援事業][地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業][共同制作支援事業][劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業]の4つの枠組みがあり、それぞれ助成事業の主旨に合致した各公演が採択されている。このうち、大型の公演事業を行っている各劇場・音楽堂等の活動は、[総合支援事業]や[地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業]での助成を受け、びわ湖ホール《ジークフリート》、東京文化会館《泣いた赤おに》のほか、サントリーホール オペラ・アカデミー公演の《フィガロの結婚》、足利市民会館《マクベス》《ラ・ボエーム》、ひろしまオペラルネッサンス《魔笛》、きりり☆かげき団による《まげもん—

MAGAEMON 一》、(公財)石川県音楽文化振興事業団《耳なし芳一》などが実施された。さらに、[共同制作支援事業]で、富山、東京、熊本の各館協働による《ドン・ジョヴァンニ》、神奈川、愛知、札幌の各館による《カルメン》が助成されている。

「芸術文化振興基金助成事業」の「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演」では、こがねいしてい共同事業体による《ドン・ジョヴァンニ》、(公財)河内長野市文化振興財団の河内長野マイタウンオペラ 2019《メリーウィドウ》、伊丹市民オペラ定期公演《カヴァリレア・ルスティカーナ》《道化師》、第28回みつなかオペラの《秘密の結婚》、(公財)のべおか文化事業団による「ひむかオペラ」《ラ・ボエーム》など、地域の文化会館活動におけるオペラ公演に対する助成がおこなわれている。大阪音楽大学の第55回オペラ公演《カプレーティとモンテッキ》の助成もこの枠組みでおこなわれた。助成金額は大きくはないものの、着実にこれらの会館の活動における継続的なオペラ公演を支えてきた助成事業である。

各地の文化会館などが、オペラ団体と協働しておこなうオペラ公演や音楽祭などは継続性ととともに一定の規模も確保されている。アマチュア団体の関与もふくめ、地域振興や鑑賞機会提供などにも継続性が担保されるなど、助成対象となった事業の組織連携には、オペラ制作の日本的なあり方が見て取れる。

この他、文化庁からの直接助成事業は複数行われており、そのうちの一つ、「文化芸術創造拠点形成事業」では、山形交響楽団/山形オペラ協会による《魔笛》、セイジ・オザワ 松本フェスティバルでの《エフゲニー・オネーギン》、オペラ彩第36回定期公演《ナブッコ》がおこなわれた。「小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVII 子どものためのオペラ」で《カルメン》、松本市民オペラが《ちゃ

んちき》、バッハ・コレギウム・ジャパンが調布国際音楽祭での《後宮からの誘拐》、(公財)北区文化振興財団が北とぴあ国際音楽祭で《リナルド》を演奏会形式で上演している。

「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」では新国立劇場オペラ研修所の《ドン・ジョヴァンニ》《イオランタ》が実施され、「大学における文化芸術推進事業」では、昭和音楽大学が《フィガロの結婚》を上演、次の時代を担う若い人材を育成する事業を展開した。

5-2. 舞台芸術政策の新たな展開

2019年は、「beyond2020プログラム」として、東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成を目的に各種事業が日本全国でおこなわれた年である。この事業の定義は、文化庁のウェブサイトにおいて「2020年以降を見据え、日本の強みである地域性豊かで多様性に富んだ文化を活かし、成熟社会にふさわしい次世代に誇れるレガシーの創出に資する文化プログラムを「beyond2020プログラム」として認証し、ロゴマークを付与することで、オールジャパンで統一感を持って日本全国へ展開」とされている。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」も「オリンピック・パラリンピックの開催都市として、文化の面からも感動を届けたい。日本や世界各国のアート、音楽、演劇、伝統芸能、舞踏、パフォーマンスをはじめ、多彩なジャンルのプログラムに、東京の様々な場所で多くの人たちに触れていただく祭典が、Tokyo Tokyo FESTIVALです」とウェブサイトでも謳っているとおり、オリンピック・パラリンピックを盛り上げるべく、都内各所での多彩な事業に対してロゴが掲出された。

2020東京オリンピック・パラリンピック後のレガシー創出を目途として助成がおこなわれる文化庁による「戦略的芸術文化創造推進事業」においても、国際発信力を高めるこ

とを具体化しようとする公演が実施されている。これも、文化プログラムの展開にむけた支援の枠組みとして制度設計されたもので、各芸術団体や劇場・音楽堂等が活動を複数年度にわたって計画してきた。まさかそれが、2020年で完結しないとは2019年暮れの時点では誰ひとり予測していないのだが。

6. まとめ

2019年も、国内のオペラ団体、公立や民間の劇場・音楽堂、音楽祭、大学、オーケストラなど、加えて海外から来日した劇場や団体による数多くのオペラ公演が実施された。例年同様の公演数であり、大規模な公演の中には、例年以上に東京オリンピック・パラリンピックに向け、海外からの観光客をむかえてインバウンドを高めるため、日本からの芸術文化創造活動の国際発信力を意識した公演が多数おこなわれた。

大規模な引越公演が華やかに実施され、地域を巡回する海外劇場も複数あり、各地で新たなオペラ鑑賞者を生み出し、国内のオペラ団体や劇場・音楽堂は互いに協力し合うことで、オペラ公演に必要な体制を確保している様子もみてとれる。

これまでの日本のオペラ公演制作の蓄積は、資金面、人材面の確保、プログラムやキャスティングなどの工夫による。行政や会館などの周年事業とかかわり、上演機会の確保がおこなわれてきている。優れた日本人歌手や指揮者などを起用できるようになったのも、これまでの関係者の努力が積み上がった結果だと言えるだろう。そしてこれらを日本の観客の存在が支えている。

資金面での苦労はかわらず続いている。年ごとに助成事業の内容が変わり、被助成団体にとっては次の助成にどのように対応するのか検討しなおさなくてはならない。しかし、それは社会の変革に伴い、助成を受ける側もその事業に合致した方法を考え出す作業である。一方で、助成金の受け渡しの作業と背景となる理念は、行政と芸術文化組織とが互いにかかわりあう時の接点となって、その間をつなぐ中間支援組織の役割も重要になってきている。

こうしてオペラ界は2019年には着実に公演を継続、実施、新機軸を模索していた。そのために、確実に人が動き、組織が次に向けた活動を継続したのである。